

張つた。フィルカは噴き出した。

「馬鹿め」と僕は嗷鳴り付けた。「何か笑ふ事がある、貴様が戸を開けた時に、犬は貴様の傍を通つて、廣間を逃げたんだ、馬鹿野郎、平常も眠つて居やがるから、仕事に気が乗らねえ、貴様俺が酔つてると思つてるな」

其奴は辯解しようとしたが、室から追ひ出して、最一遍床の中へくるまつて、朝まで寝て了つた。

「が翌晩になると又音がする、室中が暗く成つて来るや否や、耳のバタ／＼云ふ音が聞こえる。フィルカを呼ぶ、寢臺の下を捜がす、何もゐない、又彼奴を追ひだして、燈火を消す、と、畜生、又犬が居る。鼻を鳴らしたり、齒で尾の蚤を噛んだりするのが聞こえる、……如何も仕方が無い、又フィルカを呼ぶ。

「燈火を持たずに来い」と云ふと

やつて来た。

「聞こえるか」

「えい、聞こえます」

僕にはフィルカは見えないが、戦慄へて居やがる事は聲で解る。

「何の故だらう」

「魔物の仕業でしょう」

「そんな事、黙れ、馬鹿、ウム、魔物の業」

「だか、實は二人の話し聲も殆んど聞こえない位な調子だ、二人ながら熱病にでも罹つたやうに慄へてゐた。光明を點けると、犬も居ない、音もしない、フィルカと僕さう、二人共敷布か何かのやうに眞青な顔をしてゐる。それから後は終夜蠟燭を點し續けた。諸君まあ、信じて下さるか如何か知らんが、其夜から六週間でももの全じ事が起り通した。終にや慣れて了つて、

燈火も消すやうになつた。僕は一體燈火があつちや睡られない方だから。それで五六晩経過と「如何様にてもなるやうに成れ」と考へて來た、さうなるともう別に急怖くも無くなつた。

「いや君は實際豪い」と、アントン、ステバニッチは口を入れた、半ば全情したやうな、半ば嘲るやうな調子で、「いや、君が驃騎兵でゐたのは無理が無

い僕だつて「他の場合なら決して恐いなんとは思ふまい」が、とボルフイリー、カビトニ ヴイツチは答へたが、此の時は如何にも驃騎兵らしい様子を見せた。「だがまあ、仕舞まで聞きたまへ、或日、今言つた隣人が訪ねて來て、有り合はせて晝飯でも一緒にやらうといふので止つてゐた。食後僕は其男から十五ルーブルを勝負に勝つて取つた。其男は骨牌臺から立つて窓の所へ行つて、「もう出掛なさらん」と言つてゐる、僕は不圖思ひ

付いたから「いや、此夜は止まれ、明日なら必度君は復讐が出来る」と言つてやつた。

すると一寸と考へて居たが、でも同意した。寢臺を僕の部屋へ設けて、煙草を燻かしながら長い間、能く男が集まると爲るやうに女の事を彼れ此れ話し合つてゐた。僕はヴアシリー、ヴアシリツチが自分の蠟燭を消して「お寢み」と言つて、僕の方へ背中を向けるのを待つてゐた。そして、其後で五六分置いて、僕は自分の蠟燭を消した。そら、騒ぎが初まるかなと思ふ暇もなく、例の奴、身震ひをした、……身震ひをして、……猶悪い事にや、寢臺の下から出て來て、室の中を跑けまはる。床の上へ爪の音を立てる。……耳をバタ／＼言はせる、……すると、ガタンと、ヴアシリーヴアシリツチの寢臺に向つてゐた椅子を轉覆させた。「ボルプイリー」と、僕を呼び掛ける其男の聲は至つて穩かだ、「君は犬が有

るな、獵犬が」

「犬」と僕は、故意と、「いや犬なんか無い」

「ぢや何だ、椅子を覆りかへしたものは、え、何だ」

「燈火を點ける、解るから」

「ぢや、犬ぢやないね」

「うむ」

ヴァシリ、ヴァシリツチは寢床の中で寢返りした。

「悪戯るな」

「悪戯やしな」

僕はマツチのシュツ／＼といふ音を聞いた、さうやってゐる間でも、犬は室  
ぢやう駆け廻つて、折々止つては身を搔く。蠟燭は點ぜられた。……何ん  
にも居やしない。ヴァシリ、ヴァシリツチは僕の顔を見る、僕は其男の

顔を見た。

「君は僕に何ていふ悪戯をするんだえ」

「悪戯は悪戯なんだが、此悪戯は、ソクラテスとフレデリック大王を二人  
並べても、説明する事は出来ない」で、僕は全然話をしてやつた。すると  
まるで湯傷でもした猫のやうに、奴さん寢臺から飛び上つて、靴も穿かない  
中から喚き出した。其れは見せたい位だつた。

「馬を、馬を」と、

僕は宥めやうと努めたが、一層聲高く喚かせるに過ぎなかつた。「斯様な家  
に一分だつて止つてゐられるもんか。斯畜生め、馬だ馬だ」

てもとうとう宥めて、他の部屋へ寢臺の用意をさせる事にした。殊に蠟燭  
を點し續けて置くことと云ふ事で、やう／＼首肯した。朝になると、一層氣も  
落着いて來たので、茶を喫みながら僕に忠告した。

「ね、ポルフイリー、四五日何處かへ行つて来る方が好い、すりや、必然君が歸つて来る頃、此様な恐ろしい事も止んでゐるかもしれない」

て、實際此人は至つて伶俐い性質の人で、驚くべき手段で養母を制服して了つた。何でも養母の爲めに、無効の爲替手形なんかを通過させてやつたことがある。まあ、斯様工合に、突差の間に勝利をしめる能があるので、養母はもう今では手の中の羊のやうて自分の財産の全權を此男に委せつさりだ。此れ以上もう言ふ事もあるまい、まあ此様な風に養母を手に入れると云ふのは並々の事ぢやない、と思ふが、其の事は何とも諸君の判断に委せる。それはさうと、僕は其時此人と餘り好い氣分では分れなかつた。朝また百ルーブル程取つてやつたから、不機嫌で、出て行く前に「甚い目に逢はせやがつたな」と言ふから」でも、僕が悪いんぢやあるまい」と言つてやつた」

「だが、僕は其男の忠告が尤もだと思つたから、それに従つて近くの町へ出掛けて行つた。ラヌノリクトと云ふ宿舍の老爺で、僕の知つてゐる男の所へ滞在する積りて出掛けて行つた。此老爺餘程の年で、兎角がつくく不平ばかり鳴らしてゐた。それも無理のない話で、一家死に絶えて自分一人て住んでゐるからだ。此男が世の中で最も嫌なものが只だ二つある、それは煙草の煙と犬だ。此男の犬嫌と云つたら又極端で、犬のゐる室で寝る位なら野原へ行かうと云ふ勢だ。」如何したつて彼様なものを好くやうになんか成れるもんか」と平常も口癖のやうに言うて「私の室には苟も美しい「聖女」の像が懸けてあるぢやねえか、其の眞下へ来て不潔ねえ鼻綱なんか付けた、汚れた犬は嗅ぎ廻はしたりなんかして堪るものか」「ぢや外に如何爲るんだ、犬はそれさう何れも知りはしない。何人だつて、全能の神様の下すつた事より外、何とも仕方が無いぢやないか。——此が僕の信仰だ」

「だから、君は哲學者だつて言ふんだ」と、アントン、ステパニツチは全じやうな笑をしながら口を入れた。此度こそはさすがポリプイリーの眉も凝んだ。

「哲學者」と、

答るやうな調子で口唇を動かしながら言つた。「そんな事は知らん、が、僕だつて哲學位なら教へられる」

皆な皮肉な答へてもするか、それとも、少なくとも冷い流目にでもする、だら

うかと、アントン、ステパニツチの方を見た。が顧問役は其冷笑の調子を

更へて、無頓着な風に、軽く欠伸一つして、脚を動かした計りであつた。

「そこで」と、ボルフィリーは言ひ續ける、「僕は此老人と一緒に住んでゐた。

好意上老人は自分の室を僕に借して呉れた、其室は別に何の飾り付けもな

かつた。自身は衝立の陰で眠つてゐた。これが此老人の僕に盡して呉れる

最上の事で、僕もまあ暫く此宿りに忍ばなければならなかつた。室は小さ

い上に一ぱい物が塞つてゐて、空氣の流通も悪い、……蠅はゐる……

しめくする。隅の方には嘗て見た事も無い不思議な棚があつて、其上には

舊い像が立つてゐる。其像の上の覆衣は色が褪せて皺が寄つてゐる。床は

油や、薬香で燻つてゐる。實際忌々しい宿りだ。僕は寝たが、睡れない。

衝立の後ろで老人が呼吸するのも、不平をこぼしてゐるのも、ぶつく祈

禱をしてゐるのも耳には入る。其中に老爺は睡入つて了ふ。耳を澄してゐ

ると、軒が初まる。初には穩かに、やがて四邊關はずに、遂には蒸汽機關

のやうに。僕の蠟燭はもう暫く前に消して了つた。が、ランプは立像の前

にまだ消え残つてゐる。それが惱るさい、そつと寢床から出て、ランプの前

へ曲んで行つて、プツと吹くと、消えた、……「物音は無い？、好いあ

んばいだ」と思つた、「やうく慰樂になれるわい」と、寢床へもぐつて背

中をつけるかつけないに、もうまた初まつた。前に同じ掻く音、同じ耳を  
 揺らす音、……つまり、全様な騒ぎが又起つたのだ。僕は臥床の中で、  
 如何なる事か見ようと思つて、ちつと耳を澄してゐると、老人が目醒し  
 て

「貴方」と呼ぶ、「貴君」

「何んだ」

「何故ランプを消したんです、」そして、答へも待たず老爺は床から出て、  
 まさぐりながらやつて来る。「こりやまあ何だ、犬！犬！」

「まあ、待つたく、おぢいさん、怒らずに、此處へ来て、まあ不思議な事  
 ぢや無いか」

老人は衝立の陰から出て、手に燭臺を持つて僕の方へやつて来る、光りが  
 ぼんやりと其姿を寫し出す。僕は此様な姿を前に見た事がない。眼は馴

やうな恐ろしい眼だし、髯は丁度真中が眞白だし、頭には白氈の帽子、シ  
 ャツの上から黄銅の釦の胴衣を着て、足には靴下をはき、全身からは、一  
 哩先さからでも判然るやうな強いヂンの香がする。此様な服装で、老人は  
 立像の前まで行くと、二本の指で三度十字を切つて、ランプを點じてまた  
 十字を切つた、それから僕の方へ向つて嘎れた聲で  
 「ぢや、お聞きしましたしうか」

僕は全然話して了つた。老爺は床の端に腰掛けて聴きながら、折々胸を掻い  
 たり、頭を掻いたり、頸の周圍を撫でたりしてゐたが、一言も發しなかつ  
 た。

「で、フェドール、イザンさん、此れでもう全然話したのだが、如何いふもん  
 だらう。魔物の仕業かね」  
 老人は僕を見て、

「魔物の仕業！、そりや、貴君の燻つた小屋の中なら、そんな考も好いかも知れぬえが、此處では、此家では——神聖い場處だから。魔物の仕業！うむなる程」

「で、それで無さや、何だらう」

老人は考へ込んだ、黙つて身を掻いてゐた。が、吃りながら「口へ髯がは入つたから——言ひだした。」

「貴君、ベレフへ行かつしやるが好い、貴君を救つて呉れるな彼の人さうだ。そして其人はベレフにゐる私等の仲間だ。若し此人が助けようと思やだし、さもなさや、貴君如何も仕様がござんすめえ」

「で、如何したら其人の所が判然るだらう」

「をしへて上げますあ、」と老人は云ふ「だが、如何して此れが魔物の仕業だなんて事があるもんだ、幻影かも知れぬ、ともしたらお告げかも知れぬ、

——が、貴君は左様は思はねえ、まあ神様を思つて睡なさい、これからお香を焼くから、明朝話しましょう、朝になると貴君も氣が確かになんなさるで」

で、朝になつて話を聞いた。だか、今諸君に、老爺が其晩、香を焼いて、殆んど僕の呼吸も止める位に苦しめた事を話すのを忘れた。で、老人が教へて呉れた指圖は、ベレフへ着いたら某町へ行つて、右側の二軒目の店で、プロコーリツチと言つて訊ねると言つて、其人に當てた手紙を呉れた。其手紙と言ふのは紙片へ走り書きに老人が書いたので、

「父と子と聖靈の名に由りて、アーメン。」

セルゲイ、プロコーリツチへ。此人を信ぜよ。甘藍若干を送れ、賞讃へさかなな主の御名」と、書いてある。

僕は此老人に謝して、直ちに馬車を命じて、ベレフへ向つて出發した。斯

様な事を思ひながら「なる程例の夜の奴さん、僕に危害は及ぼさないまでも、僕を苦しめる。どうも此奴、紳士たり士官たる僕には面白く無え、如何いふもんだらう」

「で、君はベレフへ行つたんか」と、ブイブレントフは囁いた。

「ふむ、で、僕は其町へ行って、右側の二軒目の家で、ブロコリッチを訊ねたのだ。此邊に住んでゐるか」と訊くと、「いや、折々は見えますが」「ぢや、何處に居るだらう」「オルカ河の岸に、市外でさ」「何人の家に」「彼の方の家で」「僕は其場處へ直ぐ行つて、家を見付け出した、いや最つと適切に言ふと、小屋を見付け出した。小屋の外には甘藍を堀つてゐる人がある。背中を向けてゐるが、青い色の胴衣を着て、ぼろ／＼の帽を冠つてゐる事が目には入る。で、傍まで行つて、言つた。

「貴君がブロコリッチさんですか」

其人は直ぐ振向いて僕を見た、僕は此迄決して斯様な鋭い目を見た事が無い。老人で、がつしりした作りで、願髯ばかりで、齒は無い。

「は、私です、」と其老人は言ふ「何のお役に立ちますかな」

「此れをどうか御覽下さい」と、僕は其手紙を渡した。

すると、其老人は五六分間凝乎と僕を見認めてゐたが、それから言つた。

「私の家へ来なさらんか、眼鏡がなくては何も見えねえでの」

二人は一緒に小屋へ行つた、四角な小屋で、空虚で、窮困な有様だが。それでも、壁だけは、どうかかうか落ちずに居る。そして一方の壁に對して木炭のやうに黒い立像が立つてゐる。老人は舊い机の引出しから鐵縁の眼鏡を取り出して、鼻の上へ掛けて、手紙を讀んで、それから暫らく眼鏡越しに僕の方を見た。

「貴君は私の助力が欲しいんですかな」



「はいどうぞ」

「よし、ぢやお話をさし、お聞きしよう。」

諸君まあ、此老人を想像して御覧なさい。椅子に腰を掛けて、ポケットから手巾を取り出して丸めたり、膝の上へ伸ばしたり、——それも穴だらけの手巾で、僕に向つて、元老院議官か大臣かつてやうな重々しい態度で、僕には腰掛けよとも言はない。が實際不思議な事は、不意に僕は此人が恐怖くなり出した。気が沈んで了ふ。おろりと斜めに視たが、それでもうすつかり、まいつて了ふ。其中幾許か元氣も付いて來たらう、僕は自分の話を仕た。すると何も言はないで、眉を顰め唇を嚙んで、何とも言へない威厳を持つて、元老議官と云ふ態度で、身動もせず、僕に訊ねる。「貴君の名は、年は、両親は、妻帯か獨身か」と、此度は一層眉に皺を寄せて、唇を噛みながら、指を揚げて云ふのに、

「其立像の前へ行つて伏服になりなさい」

僕は其立像の前へ行つて、身體を一ぱいに伸ばした。何とも恐い、恭しい情を起させられるので、何とでも命ぜらるゝまゝに爲た。諸君は笑つて居るが——實際、有難くない事だ」

「起さなさい」とやうやく言つた。助けて上げる。「此はお前の身に起つた刑罰ではない。お告げだ。幸ひに、お前の爲めに祈つて呉れる者がある。店へ行つて、小さな犬を買つて晝夜傍へ置きなさい。例の奴の來るのが休むと、全時に、其犬はお前に大變役に立つたらう」

僕は天が開いて、樂園でも眺入つたやうな氣がした。僕が此を聞いた其悦びなんか、到底諸君の想像も及ぶまい。僕は恭しく辭儀をして、其小舎を出ようとしたが、只此れは辭儀位では濟まされないと、思つたから、財布から三ルーブル出して老人に贈ると、靜かに僕の手を拂ひ除けて、言ふ

に「いやそれは、會堂へても寄付するか、貧乏人にもやりなさい。私のやるやうな事は金なんか拂うもんぢや無い」。僕は又お辭儀をした、此度は腰までも曲げて、さて、店屋へ向つて出掛けて行つた。すると、如何だらう、諸君、僕が店舎へ近く行つて第一に出逢つた男は、長い粗いリンネルの外套を着て、肉桂色の、鼻先と四足の白い、二歳程の犬を抱へてゐるぢやないか。

「一寸と」と呼び掛けて、「其犬幾らだ」

「二ルーブルだ」

「まあ、三ルーブル上げる」

其男は驚いて、何か悪戯でも爲てゐるやうに思つたらしい、が、其紙幣をば無理やり呉れてやると、其男は僕の犬を馬車の所まで抱へて來た。馭者は手早く馬具を調べて、其夕方家に着いた。馬車の間ちう、僕は犬を膝の

上へのせて、犬がくんくと言ふと、僕は「トレソオル、トレソオルチコー」と呼んでやつた。食べ物や飲み物を呉れて、藪を持つて來て、寢室の中で寢床を作つてやつた。で、燈火を消して、暗の中に寢た。——待つた、「そら例の騒ぎが初まれ」と思つたが、何も聞こえない。「悪漢、此度は此方て笑つてやるぞ」。實際僕は氣丈夫だつた。「さあ來い、大悪魔め」と言つたが、只其小犬の呼吸が聞こえるさうだ。「フイルカ」と呼んだ「フイルカ、此處へ來い、馬鹿者」。彼奴はは入つて來た。「犬が聞えるか」、「いゝえ、貴君様、何んにも」、「ふむ、何にも聞こえぬ、こい、此處へ來い、貴様に半ルーブルやらあ、「お手へキスさせて下せえまし、と言つて其野郎は僕の方へやつて來た。其時僕は彼奴の言ふ通りに下させてやつた。それでも如何様に僕が悦しかつたか判明るでしょう。諸君」で、それでお終ひか」と、アントン、ステバニツチは、此度は嘲笑もせず訊いた。

「魔物の襲来は止んで了つて、二度と復び煩はされるやうな事も無くなつた。が、それで終りを告げたわけではない。トレンソルは好い犬になつた、尾が立派で、耳が長く垂れて、顎が強い、——理想的のポインターだ。そして飽迄に僕になつて来た。僕の地方では獵は多く出来ないが、でもトレンソルとなら、随分獲物も多く有つた。僕等は度々村端れの方へ出掛けて行つた、トレンソルはいつも野兎を押へる。其兎を追掛ける姿は實際お目に掛たい位だ。そりや見事な物だ、稀には鷓鴣や野鴨も追掛けたが、其外の時は如何様事があつても決して僕の踵を離れた事がない。何處へても着いて来る。浴場までも着いて来る。近隣の人は一緒に客間へ連れて入られては嫌やだといつて争つたが、僕が其婦人の爲を悪く思つては無いと話すとやうやく首肯した。

或日夏の事で、——其夏と云ふのは此迄出逢つた事のない烈しい暑い乾い

た夏であつたが、暑さは濃い霧の中に籠つてゐて、何物も皆乾いて了ふ。生色なき日が續く、太陽は高く中空に、赤い大砲の丸のやうになつて、霧の中から射してゐる。塵が立つて、人を噴せかへらせる。世の中の物が皆鳥のやうに喘ぎあえいでゐる。僕は戸を閉めて肌脱ぎになつて、室の中にあつたが、もう耐らずなつて、丁度烈しい熱さも幾分薄らいて来たから隣人を訪ねようとして出掛けて行つた。此婦人は僕の家から十町程先きに住んでゐたんで、親切で、おまけに若くて愛嬌もあるし、平常も服装にも氣を留めてゐる。が、此人のまあ、缺點と言つたら、一寸と氣まぐれな所だが、それも好いのさ、それが爲めに如何といふ事もないので、寧ろ愛嬌を持たせる方だ。僕は其婦人の家への階段を登つて行つたが、歩いて来たので怖ろしく渴いて耐らない、でもニホデラ、ゼムノヅナの親切で、越橋の酒か何か美しい御馳走で元氣附けて貰はうと思ひながら登つて行つた。戸の取手へ手を掛ける

と其の時、突然小作小舎の背後から大きな騒ぎと、かた／＼いふ聲と、小兒等の叫び聲とが聞こえて来た。見廻はすと、大變だ！、僕の前の右手の方に、僕を目掛けて飛びかゝらうとしてゐる恐ろしい獸が居るぢやないか。僕は初めは犬だとは思はなかつた。口は開いてゐる、眼は光つてゐる、毛は皆逆立つてゐる。僕はもう逃げやうたつて一寸とも動かれない。疑乎と立つて、其怪獸が階段を飛び上つて、傍近く来るのをまつてゐるばかりだ。其時、其獸は後脚で立ち上つて、猛然として僕の上へ飛び掛つた。まあ其時の怖ろしい有様といつたら、到底も諸君の想像も及ぶまい。手を揚げる事すら出来ない、茫乎としてしまつた。今でも其時の猛惡な白い牙が僕の鼻先さちらつく、泡を吹いた眞紅な舌が見える。と、其咄嗟、何物か外に僕の眼前を閃光のやうに掠めて通つた。トレンソオルだ、僕を助けに来たんだ。其の怪獸の咽喉へ吸角のやうに食付いた。すると、其獸の唸りやう、

歯をぎり／＼いさせて、轉びまはる。僕は戸を開けて、何處とも知らず、取次部屋へ飛び込んで、有りたけの力でやうやう戸に寄りかゝつた。さうしてゐる間も怖ろしい戰ひは階段の上で續いてゐた。僕は始めて聲を立て、助を呼んだ。家の中ぢう大騒ぎ、ニフォデラは頭髪を亂して馳け下りて来る。暫くすると、騒擾は止んだ、何人か「まで、まで、門を閉める」と言つてゐるのが聞こえる。門は先刻僕が半分開け放にて来たのだ。人々は垣根の中を馳廻つてゐる。腕を上げたり、一緒になつて疫病神からでも追掛られるやうに飛び歩いてゐる。「やあ、村の方へ行つた」と年寄の婦人が言ふ、「もう村の方へ行つて仕舞つた」と叫んでゐる。其婦人の帽子が軒先の窓の下を馳けて行くのが見える。僕はまた階段の所まで出て来ると、まあ、何處へ行つたかと思つたトレンソオルが、其處へ来てゐるぢやないか、僕の救助者は歸つて来たんだ、ぐつたりして、傷だらけて、血を流して。

「一體如何したつてんだ」と僕は、火事場のやうに騒ぎ廻つてゐる人々に訊くと、

「ありや、伯爵家の狂犬でさ、昨日から此邊をうろついて居やがるんで、此近邊に伯爵が居て猛烈い犬を飼つて置くものと見える。怖ろしい悪魔を追放したもんだ」と言ひながら、僕は何處か負傷でもしやしないかと、鏡の前へ行つて見たが、引掻き一つない。有り難い事だが、顔色は眞青だ。ニフォデラは長椅子の上で、ぐすく牝鶏のやうな聲を立て、ゐたが、克くありがちな、初めは痙攣るやうで、其中に稍々気が静まつて、やがて元氣に復して来て、僕に尋ねる。

「でも、まあ、よく御負傷も無くツて？」

「え、大丈夫、トレンオルの御蔭です」

「まあ、殊勝なものね、狂犬があれを殺して」

「いや、死にはしないが、甚く負傷をした」

「ぢや、直く射殺しては」

「いや、そんな事は出来ない、治療してやらうと思ふ」

そう言つてゐる途端に、トレンオルは戸を外から引掻いたので、開けてやつた。

「まあ貴君」とニフォデラは言ふ。「何を貴君はなさるんです、喰付きませすぞ」

「いや、だかそう急に其様な事もあるまい」

「でしやうか、貴君は如何かしてゐらやつしやる」

「ニフォデラ、まあ静かに、氣を落ち着けて」と僕は言つた。

が、もう、其人は泣き出した。

「早く、早く、そんな怖い犬を連れて行つて下さる」

「え、え、え、行きますよ」

「直ぐに、もう一分だつて居ては嫌や、ね、直ぐ行つて、貴君も氣違だ、も  
う顔も見たくもない、貴君もさつと狂人になる」

「よろしい、行きます、が、馬車を賃して、家まで歩いて行くやうな危険は  
嫌だ」。すると其女は僕の方を見て、

「え、馬車でも何でも御好み次第、早く行つて下さい、まあ貴君、あの犬  
の眼！其女は客間を出て行つたが、行きながら戸の所に待つてゐた小間使  
の耳を一つ擲つて行つた。そして聞けば、寢室へは入つて二三度ヒステリ  
の痙攣を起したとの事だ。諸君、何とても諸君の判断に委せるが、其日限  
り僕とニフォデラとの交情は絶えて了つた。命を救はれた恩もあるが、此れ  
もトレンオルの御蔭だ。それはそうと僕は馬車を命じて、トレンオルを一所  
に連れ込んで、家へ歸つた。傷所を驗らべて洗つてやつて、それを縛つてゐ

ると、不圖思つたニ明ロエフレムにゐるあの伶俐い巫女の所へ連れていか  
う。」と。此巫女と云ふのは年寄つた農婦で、色々な不思議な事をする。水を  
持つて来て何か怪しい事を念ずる。其水と蛇の粘液とを混ぜるのだと云ふ  
者もある。此水一ぱいを飲むと人は健康になる。其時僕は又斯う考へた。「僕  
も血を絞つて貰はう、斯様なに激昂した後ではそうするのが一番好い、小  
窩から血を取つて貰はう」

「小窩で何處だ」とフィンブレントフは、おづ／＼しなから聞きたげに訊ね  
た。

「知らないか、そう、そら食指と拇様との間の此小さな窪みね、君がバイ  
フを丁度に持たうとする其窪さ、それが小窩だ。血を採るには最も好い處  
だ。普通の醫者なんか知らないが、獨逸の乞食なんかでも知ん者はない、獸  
醫は此處を刺す事が上手い、一寸と母針を指込で、衝いたかと思ふと、もう

刺されてゐるのだ。」

トレンソルの傷處を洗つて了つた時はもう寝る頃になつたから、僕は臥床へは入り、トレンソルは傍に横になつた。暑さの爲めか、烈しく感動した爲めか色々考へた故か、蚤の爲めか知らないが、如何しても眠る事は出来なかつた。で、起き上つて水を飲み、窓を開けて、ギターを鳴らし、伊太利の調子で "Moujik of Konorio" を奏したが、やつぱり駄目だ。遂々室に居たゝまらなくなつて、枕と敷布二枚とを持ち室を出て、庭へ行つて乾草小屋の中へ横になつた。氣は樂になつた。其夜は平靜な夏の夜であつた。折々微風が、少女の手のやうに軟かに觸れて顔を吹いて行く。乾草の香が心地好く匂ふ。蟋蟀は果樹園の中で鳴き、鶉が露を浴びて、雄の傍へ寄つて、心足つたやうに鳴く、朗かな空からは小さな綿のやうな雲がちぎれて飛んで、靜かに星影の下を過ぎて、消えて行つて了ふ。

此處まで話して來ると、スコレヴィツチは噴嚏した。キナレヴィツチも單にお付合ひで同く爲た。するとアントン、ステパニツチは、「しつかり爲なさい」と言つたやうな風に二人を見た。

「そこで」とポルフィリーは語り續けた。「僕は横になつてゐたが、目を閉じる事すら出来ない。枯草の中に身を伸ばして、星を見ながら、色々な事を深く考へてゐた。主に僕の身に起つたお告げの事や、プロコリツチの言語だのを思ひ耽つてゐた、何故彼様な怖ろしい危険が身に起つて……而かも何の災害も及ぼさずに過ぎたんだらう、と思つてゐると、トレンソルは折々クン／＼いつて、枯草の中で、身を轉回してゐる。傷が休ませないのだ、すると、其時僕は何故目を開いてゐなければならんかが解つた。月が――諸君は信じられるか、どうか、知らんが、實際だ、平たい大きな黄色な月が僕の身の周囲を照らし出した、どうも、僕を苦しめる爲めに出たもの

とより外は考へられない。で、僕は其方へ背を向けて了つた。けれど、やつぱり耳だの頸だのを照らしてゐる、光は雨のやうに僕の上へ注ぐ。遂に僕は目を開いて了つた。細い葉の尖端までも、枯草の實までも、蛛網の絲さへ劃然と、此怪物のやうな月に照らされて見えるぢやないか。月は僕に向つて、「此處を見よ、自分を注視せよ」と言つてるやうな氣がする。僕には左様するより他に仕方が無かつた。で、手で頭を押えて、坐つて其光の圓盤を眺め入つた。暫く見詰めて居ると、僕の眼は野兎の眼のやうに鋭くなつて、目には入る物は何でも熱心に見詰めてゐると、睡氣はもうすつかり忘れて了つた。小屋の戸が開いてゐて、五六哩も續いてゐる田舎の景色が目には入る。實際見える事は見えるが、能く判然らない處もある。明らかではあるが、月下に處々陰影がある。僕は遠くの方を見詰めて坐つてゐた。すると突然——何か、遠い、遙か遠い——先の方で、動いてゐるやうに思はれた——

——又不意にそれが陰影の中へ消えて了つた。又彰はれた、が、猶遙か先方だ——此度は稍々近くなつて來た。「何たらう」と考へた。「野兎かな」。そうだ此方のほうへやつて來るんだ、少したつと、どうも野兎にしちや少し大きすぎる、野兎ではないらしくなつた、凝乎と見詰めてゐた。また彰はれた、此度は能く見える、月下に白く光つてゐる草原の中の一黒點、鹿でもない狐でも、狼でもない。僕の心臓は固くなつた。だが何故怖いんだらう只夜歩さする獸ぢやないか。怖いよりは幾分物珍しさに僕は身を起して、手で眼を擦て見た。——すると、背中から水を浴びせられたやうな氣がした。あゝ神様、何を其時僕が見たと思ふ、諸君。陰影は大きく次第に大きくなつて、右左に飛びながら、其度毎に戸口へ近寄つて來る。と思ふと、戸に向つて衝突つて來た、怖ろしい巨きな頭をした怪物だ、——颯風か、彈丸か何かの様に、まあ諸君、其時の僕の居場處を考へて見たま



へ。と、復た戸口へ彰はれて、躡ぎ初めた。狂犬ぢやないか。もう僕は動きも出来なければ、聲も出ない。咆えながら戸口から飛び込んで来て。眼を光らせて、丁度僕の前方の右手の草の上へ身を投げた。トレンオルは眼を醒ました。二匹は咽喉を噛み合つて、ごろ／＼轉がる。その後は如何したか覺えも無いが、僕は俯伏に積草の中へ倒れて了つた。が、又飛び起きて、庭を走つて、寢室へ来るまでは決して止まらなかつた。其時の姿は見ものだつたらう、僕は實際賭けるが、いくらナポレオンの宮庭の身輕な舞踏手でも彼時の僕は捕へられなかつたに違ひない、幾分氣も落ついて来たから家ぢやを叩き起した。皆て用意をして、僕は劍と短銃とを持ち出した。——此短銃は「農奴開放」の直ぐ後で行商人から買ったものだ、此奴悪い奴で、三發射せば、二發は必然と駄目なやうなものだ。でも銃丸を籠めて、一人の男はかんでらを持つて、小舎まで行つて見た。近付いてトレンオルは呼

だが、返事がない、は入つて見ると、まあ如何だらう、此勇ましいトレンオルは、呼吸の根をとめて、死んでゐるではないか。——て、其狂犬は何處へ行つたか、影も形も見せない。其時、諸君、僕は小兒のやうに泣き出した。いや耻も關はず言ふが、僕は、此二度までも僕の命を救つて呉れた可憐な動物、僕の友人の傍へ膝をついて、再三其頭へキツスした。で、僕は其儘で、凝然としてゐると年寄つた支配人のプラスコヴィーが、急いで騒ぎの場處へやつて来て、僕に斯う云ふ。

「何故そう犬一匹の爲めに泣いてゐなされるだ、命の助かつたのは神様に御禮を言はつしやい。そんな事してゐなされると風邪ひきますぞ（實際僕は極く薄着をしてゐた）、貴君の命を救つてそれで、自分の命を無くしたなら犬だつて大した譽てさあ」

兎に角、僕はプラスコヴィーの忠告に従つて家へ返つた。翌日一人の兵士

が此狂犬を射殺した。愈々犬の最後の時が来たのだ。此兵士は千八百十二年に國の爲めに盡くしたと云ふので賞牌をもらつた事はあるが、それ以來初めての一發で其犬はもろく死つて了つたんだ。即ち此れだ、諸君、僕の身に奇怪な事が一度起つたと言つたのは、此れだ」

話し手は此れでやめて、パイプへ煙草を塞め初めた。我々は互に顔を見合せて何を考へるべきか知らなかつた。

「ふむ、確かに君は善良な生涯を送つてゐたに違ひない。」とフィンブレントフは言つた。「其報酬なんだ」と斯う言つたがホルフリーの頬が脹て、いかにも紅くなり出したので、突然やめて、目を盛て、笑ひ出した。

「だか、やはり人が奇怪な事を信じたしたら、もう理性的動物とは言へないね」と、アントン、ステパニツチは同じ事を繰り返したが、何人も答へなかつた。今日に到るまで、此事に就いては我々は困惑の状態にゐる。

## 山番

私は或夕方一人て早仕立の馬車で獵から歸つて来た。家から丁度六哩位、元氣の好い足疾の牝馬は、塵埃の立つ路をば、折々鼻を鳴らしたり、耳をば動かしたりしながら元氣よく走つて行く。疲れた犬は車の後輪の所へ結びつけられてもしたやうに、喰付いて来て離れそうにもしない。

嵐は初まりかゝつて来た。行く手に當つて、巨きな紫だつた嵐の雲がとして森の向ふから登つて来る、長い灰色の雨雲は前方から迎かえるややつて来ては頭上を越えて飛ぶ。柳の樹の影が亂れて、小休みなく囁きた。息も塞がるやうな暑さは急に濕つた寒さに變つて、闇が迅速に濃くて来た。

私は手綱で馬に一撃あて、急坂を下つて、水の乾いた藪の一面に墜

てゐる川を越えて、丘に登り、森の中に駆け入つた。途は眼前に走つてゐる、濃い榛樹の藪の間に曲るかと思へば、闇の中に没して了ふ。進むには中々骨が折れる。馬車は上下に動揺して檜の樹菩提樹などの古株の上を走る、此等の古株はいつも深い車轍——荷馬車の轍で挽かれてゐる。馬は屢々躓き初めた。

不意に烈しい風が頭上で鳴り出した。樹々は荒れ嘈ぎ、大粒な雨はぼつぼつと葉を叩いて飛ぶ。と思ふと、電光一闪、雷が鳴り出した。雨は忽ちに瀑布となつて落ちる。一步か二歩進んだかと思ふと、直ぐ留められて了つた。馬が躓いたのだ。一寸先さも見えない。何處か藪陰に身を隠そうと、這ひ降りて顔を掩くして、嵐の過ぎ去るのを凝と待つてゐると、不意に一闪の電光、路上に立つてゐる身長の高い人影が目には入つた。私は今の方向を熱心に見詰めた。——馬車近くの地面から湧き出た者のやうに思はれる。

「何人か」と鳴り渡るやうな聲で訊く、

「ム、お前こそ何人だ」

「私は此處の山番だ」

そこで私も自分の名前を告げた、すると、

「ア、そうですか、今お歸りかな」

「そう、だか、此嵐でね……」

「そうですね、此れでは」と其聲が答へる。

青白い電光の閃きは此時山番の全身を照し出した。がらくと云ふ雷の響が直ぐ此に續いた、と思ふと、雨は一層烈しく降り出した。

「なかく止みそうもありましねえな」

「如何したら好いだらう」

「何なら、私の小屋へおいでなは」

「それは有難い」

「では馬車へお乗りなさい」

山番は馬の頭の方へ行つて轡を執つて引立てた。そこで出掛けた。私は海の上の小舟のやうに動揺る馬車の中へ坐つて、犬をば呼んだ。可愛そうに馬の奴、滑つたり躓いたりして泥の中をこねくつて行く。山番の姿は車の前を右左に亡霊のやうに浮んで見える。

「少々長く進んで行つたかと思ふと、遂に案内者は止つて、

「さあ、参りましたぞ、貴方」と落着いた聲で云ふ。門がギイーと鳴つて、犬の兒が人來たと鳴く。頭を上げると、閃光の波るので、廣い編垣で圍まれた庭の中に小さな小屋の建つてゐるのが目には入つた。小さな窓から薄暗い光が微めく、山番は馬をば踏段の際まで挽いて行きながら戸を叩いた。

「歸へつた、歸へつた」と小さな通る聲で云ふのが聞こえる。裸足でバタ

く歩いて、やがて戸の門を外す、と十二歳ばかりの女の兒が小さな襦袢なつた肌着を布切で腰の周圍に纏ひ付けて、手に手燭を持つて戸口へ出て來た。

「一寸と燈火をお見せ申せ」と娘に言ひながら馬車は物陰へ入れて置きませへえ」

娘はちらと私を見て、家の中へは入つて行く、私も續いて行つた。

山番の小屋は只一室さうだ、煙つた、天井も低く、カーテンも區分の壁もなくガラツとしてゐる。壁土にはぼろ／＼の羊皮が掛つてゐる、腰掛の上には單發銃が載せてある。隅の方には檜樓が山のやうで、籠の傍には二つの大きな壺がある。松の木の片はテーブルの上でゆらくと燃え上つたり又悲しうに消えたりしてゐる。家の真中には一つの搖籃が掛つてゐて、長い平な棒の先端で支えてある。

娘は手燭を消して小さな腰掛へ坐つて右手で搖籃をば動かし初め、左手で燻つてゐる松の片をば取繕つてゐる。ぐるつと家の中を見廻すと——氣が沈むやうに思ふ、夜中農夫の小屋へ訪ねて行く事は決して愉快なものではない。搖籃中の小兒は呼吸づかひが忙はしく苦しげだ。

「お前は只だ一人さりてゐるの」と娘に訊いた。

「え、」とやう／＼聞こえるやうな調子で言ふ。

「お前はあの山番の娘？」

「え、」と娘は唸た。

戸がギイーと云つて、山番は頭を下げて、鬨を越えて來た。そして床から手燭を取上げて、テーブルの所まで行つて蠟燭へ點火した。

「貴方は木片の明火なんかには慣れてゐなさらねえづらが」と言つて、縮毛をば後方へ掻きやつた。

私は初めて此男をば見た。まあ此様な奇妙な男に逢ふのも不思議な運だ。身長の高い、肩巾の廣い、奇態な鈎合をした身體、其力の籠つてゐる筋肉は濡れた手製の襯衣の下に節くれ立つて露はれてゐる。縮れた黒い口髭は嚴しい男らしい顔の半分を隠し、小さな蒼色の眼は、濃い眉毛の生え連らなつてゐる。下から、物憶じしな言ふ風に覗いてゐる。そして私の前に立つて、両手を軽く腰の上へ載せてゐる。

私は禮を言つて其名を訊くと、

「ホーマてつてさあ、けれど、ピリユーク(狼)と云つてゐますさあ」

「ああ、お前がピリユークか」

私は前にも増して一層好奇心に驅られて其男を見た。私の獵夫のエルモライや其外の者から山番ピリユークの事は屢々聞かせられた。此周囲の百姓共はピリユークをば火のやうに恐怖がつてゐる。彼等に從ふと、此れ迄て此

男位職務に忠實な者を見た事がない。』どうして、一掴の藪だつて持つて行かせやしない。何時如何なる時でも、假令ひ眞夜中でも駄目だ。雪崩の様に落ちる。いくら抵抗しやうたつて駄目だ、——巖丈な悪る猾い悪魔のやうな男だ。何をしたつて到底駄目だ。ブランドーであらうが、金銭であらうが、土喜彼の男を引掛ける係蹄は無いのだ。此迄でも幾度なく殺んで了ふと爲たが駄目——一向効目が無い。』まあ、此様なやうな調子で近隣の百姓共はビリユークの事を話し合つてゐる。

「あゝ、そうか、お前がビリユークか、』と私は復た繰り返した。『お前の話はよく聞いてゐた、お前は何人にも恵をかけてやらないと云ふ事ぢやないか』  
「ナ、ニ私は私の役目をする分てさ」と、猛々しい調子で答へる。『御主人の穀を只で喰べるなんか宜くねえ事てさあね』  
腰から手斧を抜いて木片を割り初めた。

「女房は無いのかね」と訊くと、

「ハイ」と手斧を烈しく打卸しながら答へる。

「亡くなつたんだね」

「イ、エ……ハイ、死にました、』と言ひ足して、彼方を向いて了つた。私は黙つてゐると、眼を上げて、一寸私の方を見て。

「實は旅商人と逃げて了つたんでさあ、』と苦笑をしながら言ひ出した。少娘は頭を垂れてゐる。赤兒は目が醒めて泣き出した。すると娘は立つて搖籃の所へ行く。『さあ、此をやれ』と不潔い乳纏を娘の手へ押し付けてやつて、此様な者せえ、捨て行つたんで』と赤兒の方を指しながら低い聲で云つたが、つと立つて戸口まで行つた。立止つて、振返つて、

「貴方様など、到底我等のパンやなんぞ召上るめえが、パンさり別に……  
「いや何も欲しくないから」

「いや、そうも仰るずらが、湯を湧かしても茶もねえし、……まあ行つて、馬でも見て來ますべし」

出て行つた。戸が後方にはたと閉つた。私はまた家の中を見廻すと、前より一層陰氣な氣がして來る。強いかび臭い匂ひは氣持悪く呼吸をも塞ぐばかりだ。娘は坐つたまゝして身動もせず、眼も上げない。折々搖籠を揺つたり、襦衣の肩から滑り落ちそうにするのをもちくと引かけてゐる。そして何も穿かない足をばぶらりと下へ垂らしてゐる。

「名は何て云ふの」と訊くと、

「ウリタ」と云つたが、悲しそうな小さな其顔をば一層下へ向けて了つた。

山番は又は入つて來て腰掛へ掛けた。一寸と黙つてゐてから、

「嵐はやんで了つた。若し何なら、森の外までお伴いたしますべえか」

私は立ち上つた。ピリユークは銃を取り上げて薬地を調べて見た。

「如何すのか」と尋ねると

「森の中はや随分悪い奴がゐましてね、其奴等屹度メアの谷で樹を切るのてさあ」

と私が如何にも事問ひたげな風をしてゐるので、言ひ足した。

「此處から聞こえるかな」

「戸外へ出れば聞こえますあ」

二人は一所に出掛けた。雨は止んだ、が、重々しい嵐の雲は猶遠くの方に亂集して居て、長い電光が絶えず閃いてゐる。が、既に其處此處に暗い蒼空が覗いて星は疾走する雲の中から輝いてゐる。森の輪割は、雨に濡れ、風に揺れて闇の中に劃然と見えだした。二人は耳を澄して聞いた。山番は帽子を取つて、頸を傾げた。

「あ、……彼處だな」

と山番は不意に言た、そして手を前方へ伸して、「非常に晩を選だもんだな」。私には木の葉の戦の外何も聞かない。ピリユークは馬屋から牝馬を引き出した。「だが、此處から行つちや逃げて了ふつらが」と高聲で言ふ。「そんなら、私も一所に行かうか」と言つて馬を以前の所へ引入れた。直ぐ掴まる。そしてから森の外へお連れ申さう。さあ行んなされ」。二人は出掛けた。ピリユークが先に立ち、私は後方から續いた。如何して路を見付けるのかさつぱり解らない。一二度止つたが、それも斧の響を能く聞き取る爲めであつた。

「そら、聞えます、聞えます」と囁いた。「え、何處に」ピリユークは肩を聳かした。二人は谷へ降りて行つた、風は其時静かになつて、調子取つた斧の響は手に取るやうに聞こえて來た。猶遠く濕つた羊齒や尋麻の中を進んで行つた。すると、低い覆包せるやうな響がした。

「切り倒しやがつた」とピリユークはつぶやいた。もう空は次第に明るくなつて、森の中には微かな火光が見える。二人は遂に谷の外まで達した。「一寸と此處で待つてゐなされ」と山番は私に囁いて、曲んで、頭上へ銃を上げたまゝ、藪の中へ没して了つた。私は一心に氣を張つて耳を澄ました。風の断えず吹き渡つて行く響の中から幽かな音が手近く聞こえて來る。注意して藪を切拂ふ斧の音、車輪の響、馬の鼻を鳴らす音……

「何處へ行く、待て！」ピリユークの鐵のやうな聲が不意に鳴り渡つた。すると。悲しそらな、係蹄に掛つた兎のやうな叫び聲がする。……争ひが初つた。

「駄目だ、駄目だ、悪い事をしやがつて」とピリユークは呼吸せき切つて言ひ伏せる。「逃げやうたつて駄目だ」。私は噪ぎの方へ急いで一步毎に躓つさまづき其場へ飛び出した。切倒された樹は地上に横たはつてゐる、其に近く



ビリユークは盗人を押え付けて忙はしげに攻めてゐる、盗人の手はもう後方へ廻はされて手巾で縛られてゐる。一層近くへ寄ると、ビリユークは立ち上つて盗人を足で踏み付けた。襦袢を着て、雨でびしょ濡れになつて、髯の長く伸びてゐる農夫だ。手近にはいかにも哀れぼい小さな馬が、半身だけ産を着せられて立つてゐる、粗末な荷車もある。山番は一言も發しない。農夫も黙つてゐるが、其頭は震えてゐる。

「放してやれ」と私はビリユークの耳許で囁いた。「樹の代は私が拂つてやるから」

ビリユークは一言も言はず、左手で馬の鬣を取つて右手で盗人の帯を掴んで、「さあ其方に向け、此野郎と」猛々しうに言つた。

「其處に斧があるで、取つて」と農夫は口の中でぶつ／＼言ふ。

「置いて行く理由もねえさ」と山番は言つて、其斧を取上げた。皆して歩み

出した。私は後方から従いて行く。……雨は復たばら／＼し出したと思ふと直ぐに大降りになつて來た。やう／＼の事で小屋まで辿り着いた。ビリユークは分取つた馬を庭の中央に繋いで、農夫をば家の内へ入れて手巾の縛り目を解いて、小舎の一隅へ坐らせた。小娘は爐邊で眠つてゐたが、驚いて飛び上つて、怖ろしうに黙つて私等の方を見てゐる。私は道具箱の上へ腰を卸した。

「あゝ、ひどい降だ」と山番は言ひ出した。

「貴様此止むまで待つんだぞ、横になりてえか」

「ハア、どうか」

「貴方様には恐れ多いで此奴を階上の物置へでも入れつと思ふが」と、農夫の方を指しながら、でも、逃げ出してもすると……」

「此處に置きなさい、關まはんで」と私は口を入れた。

農夫は眉の下からちらつと私の方を盗み見た。私は如何様な事をして可哀そうな男を助けてやらうと思ひさめた。其男は臺の上に腰を掛けて凝然としてゐる。カンテラの光明で見ると、やつれた筋立つた顔を掩かぶせるやうな黄ばんだ眉毛とぎよろ／＼動いてゐる目と、其瘦せた手足、とが明かに眼には入る。……少娘は床の上へ坐つて、復た眠り込んで了つた。ピリユークはテーブルの前に腰掛けて、両手で頭を押えてゐる。家の隅の方では蟋蟀が鳴き出した。……雨は屋上にぱた／＼と落ちて、窓を傳つて流れ降る。皆の者は黙つて了つた。

「フオーマ、クツァミッチ」と農夫が不意に太い震える聲で言ひ出した。フオーマ、クツァミッチ……

「何だ」

「免して下せい」

ピリユークは答へなかつた。

「免して下せい……食ふに困るもんだで、つい……免して下せい」

「知つてゐるぞ」山番は厳しく言ひ返した。「貴様の一族は皆な同じだ——皆んな盗人だ」

「免して下せい」、農夫は繰返す。「親方……私等皆な困つてゐやすで、とう／＼此様な事に——どうか、免して下せい」

「困つてゐる、當り前だ……何人が好いて盗賊する奴がある」

「どうか免して下せい、フオーマ、クツァミッチ……助けて下んせ。親方、お情に、どうか」

ピリユークは横を向いて了つた。農夫は烈しい熱病にでも罹つたやうに震えてゐる。頭は揺れ、呼吸はとぎれ／＼に喘いでゐる。

「免して下せい」可哀そうに絶望的に繰返す。「免して下んせ、どうか、免し

て下んせ、代は拂ひます、何んとしても屹度。此も食ふに困るもんだて、  
 ・小さい餓鬼共は泣いてゐるし、お前様だつて知つてなさる。やり切れねえ  
 事だ」。

「だが、何も盗みをするにや及ばねえ」

「私の馬だけは」農夫は言ひつゞける「あの小さな馬だけでも 私達等の

一つさりの馬だて……どうか、あれでも免してやつてお下んし」

「駄目だつて事さ、俺の勝手にやならねえ、責任があらあ、貴様に役目を汚

されて耐るもんか」

「どうか免して下んせ、困つて仕た事だつて、フオーマ、クツァミッチ、只そ  
 れつさりの事だつて——どうか免して下んせ」

「解つた」

「あ、ぢや免して下んすか」

「馬鹿、もう貴様に用は無え、静かに坐つてゐる、て、ねえと、擲り付ける  
 ぞ、此處に旦那の居るのが見えねえか」

可哀そうに其男は頭を下げた……ピリユークは欠伸をしてテーブルの上へ  
 頭を載せた。雨は猶降り止まぬ。私は如何なり行く事かと待つてゐた。

農夫は突然立ち上つた。眼はぎら／＼輝いて、顔は赤黒く光つた「來い、  
 さあ來い。出て來い」と眼に皺を寄せて、口の角を下へ垂らしながら、「來い、  
 人の生命食奴め、キリスト信者の血を飲め、飲め」

山番はさよろつと見廻した。

「克く聞け、亞細亞人の此の生血吸ひめ」

「酒にても酔つてゐやがるか、亂暴を言やがつて」山番は當惑して言ひ出し  
 た。「氣が違やがつたな」

「酔つたて、貴様の世話にやなるめえし、人殺め、——畜生、畜生、畜生、」

「うじ、此野郎——甚い目に逢はせるぞ」  
 「何だ、そんな事だ、同じでえ、どうせ斯うなつちや。家が無くても何が出来る。殺ろせ——どうせ同じでえ、食へねえて死ぬも、殺させるも同じでえ。皆を殺ろせ——女房も子供も——皆一時に殺ろせ。だが、待て、此方から貴様を殺してやらあ」

ピリエークは立ち上つた。

「殺ろせ、殺ろせ」と農夫は亂暴な語調で言ひ續けた。「さあ、殺ろせ、さあ殺ろせ……」(少娘は床から飛び上つて、其男を見詰めた)「殺ろせ、殺ろせ」

「黙れ、山番は吐鳴り付けて、二歩ばかり歩み出した。

「止せ、フオーマ、止せ」と私は聲を擧げた。

「免してやれ……穩やかに免してやれ」

「何で黙るもんか、不幸な男は言ひつゝのる。何方でも同じだ——めちやくち

やだ、人殺し、畜生、克く今迄生きて居やかつた……今少し待つてろ、意張るのも長い事だ無えぞ、皆で貴様の頸を引撓つて了ふ、一寸と待つてろ」  
 ピリエークは農夫の肩を押え付けた。私は助けてやらうと其處へ飛び出した。

「打捨てお置なせえ、旦那」と山番は叫び出した。

私は彼の強迫などは恐くない。私の拳は既に高く振上げられてゐた、が實に意外だつた。山番は農夫の肘から手巾を引奪つて。頸玉を掴んで引立たせて、帽子を眼まで冠ふせて、戸を開けて押し出してやつた。

「馬を引張つて、勝手に行きやがれ」と後方から叫んだ。「だか、此次きは氣を付ける……」

山番は引返して来て、家の隅で何か捜し初めた。

「あ、ピリエーク、お前は私を駭かしたね、如何にも手際な事をやる男

「だ、お仰るな、昔、と如何にも困つたと云ふ風で私を遮つて、」どうか  
 其様な事は仰ら無えて、それよか、お送りしますべえ、此ばかりの雨は晴  
 れるのを待ちなさるにも當るゆえ……」  
 庭の方では今の農夫の車の音がたたく、聞こえてゐる。  
 「今、行きやがる、が、此次ぎには」とつぶやいた。  
 半時間後、山番は森の端で私と別れた。

ツルゲーネフ短編集(終)

明治四十一年十一月廿五日印刷  
明治四十一年十一月三十日發行

ツルゲーネフ短編集  
定價金五拾錢

著作者 吉江喬松

發行者 山縣文夫  
東京府下北豐島郡東葛城町  
大字上駒込十九番地

印刷者 青木弘  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町  
一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場  
東京市牛込區市ヶ谷加賀町  
一丁目十二番地



不許複製

發行所

東京巢鴨郵便區上駒込山縣邸内  
電話(國距離)加入 下谷四百三十八番

内外出版協會  
(振替貯金口座番號三五五)

ツルゲーネフ作 相馬御風譯

近代傑作集  
第一編

# その前夜

▲再 版  
定價金七拾錢  
郵 稅 八 錢

本編は露西亞文學の明星イヴン・ツルゲーネフの傑作『オン・ジ・イヴ』を譯出せるものなり。ツルゲーネフは我が新興文學の促成に絶大の影響を與へし人、其作品の我れに味讀せらるゝ素より久しと雖も、而も尙ほ彼れが長篇小説の移植を企て、そが全風趣を採るに自由ならしめたるは尠し、『その前夜』の出づる、眞に偶然にあらざるなり。想ふに『オン・ジ・イヴ』は、ツルゲーネフが露國一代の風潮に省み、一國の青年に精神的革命の氣運を導かんとして試みしもの、一篇作中の裏面に在つては、鬱熱して休むなき國民覺醒の精神が千波萬波を掲げて北歐の天地に轟き、空は乃ち革命に東明せんとす、其夜明前こそ我が『オン・ジ・イヴ』の暗語なり。かくの如く革命の火蓋に手を着けし著者は『オン・ジ・イヴ』に於て又慥かに藝術の最妙手たるを得たり。此篇の如く圓熟無縫の姿にあるもの彼が作中にあるなく、此篇の如く女性の描

寫に巧妙なるもの近代小説中にあるなし、げに自然派作中の代表作と推稱せらるゝも理なり。譯者御風氏、詩人として作家として夙に我が新藝苑に濶歩す、今其譯筆をけるに清新の滋味に富み、原作の面影を移すに自由なり、一讀直に藝術の新泉に浴するを得べし。此一本を汎く新興文學に與する諸子に薦むると共に、天下の讀書子が、來つて醒たる女エレナの戀に同感せん事を望む。

## 「ほと、ぎす」批評

『近代傑作集』の一として、露の文豪イヴン・ツルゲーネフの作『オン・ゼ・イーヴ』を譯したものである。主人公はエレナと云つて露國中流の家庭に於ける一處女、之に對して、快活なる才子肌の美術家、理性に富める哲學者肌の學生、祖國ブルガリアの滅亡を慨し、其復興を圖らんとする愛國の志士等、各特殊の性格を示せる人物を描出して、主人公エレナが性情の變化發展し行く様を叙し、遂にエレナが父母を棄てて故郷を捨て全身の愛を傾けて結婚したる志士インサロフが、故國の同志よりの急報に接して彌々革命の旗を翻さんとする時機に溢み、歸國の途中激症の爲めに斃れたので、エレナは健氣にも亡夫の志を繼いで終にブルガリアの軍に身を投ずる、と云ふに一篇の結末を告げて居る。而して女性を描くことには特に妙を得たる作者の筆に成れるエレナは云ふまでもなく、其他の人物の描寫に於ても實に巧な處がある。ツルゲーネフの呼び聲が盛んなる割合に、まだ一向長篇の作が紹介せられて居ない

今日、斯る大作を譯了せられたのは、一般讀書界の爲め大に喜ぶべきことである。

### 『中央公論』批評

ツルゲネフの著『オン、ゼ、イーヴ』を譯したものであり。我が現今の小説界に於てツルゲネフほど歓迎せらるゝものなき模様なれども、其の翻譯は決して多しといふべからず。殊に彼の長篇に至つては、僅かに二葉亭氏の『浮草』（ルーヂン）を除く外、未だ一の翻譯を見ず。吾人甚だ之を遺憾としたりき。御風氏の翻譯、若し強いて難をいへば、字句等の末に於て些か洗練を缺く處なきにあらねど、概して流麗暢達の筆路、確かに好譯なりといふを妨げず。男主人公インサロフは少しく木偶の如しといふ批難もあるやうなれど、其女主人公エレナは女性を描くに巧みなるツルゲネフの作中に於ても最も傑出したりと噂せらるゝもの、一度巻を開けば讀み畢ることの早さを啣たしむるもの、是れ實にツルゲネフの靈腕によらずんばあらず。吾人はかゝる眞面目なる翻譯の續々出版せらるゝことを祈る。（中央公論）

### 『早稲田文學』批評

繊細凄艶の筆致を以てロシア文學史に異彩を放つイワン、ツルゲネフは若き女性の解剖に於て特に無双の稱がある。此特色はオン、ゼ、イーヴの女主人公エレナに於て最も遺憾なく現はれて居る。『その前夜』はこのオン、ゼ、イーヴの翻譯である。若き女の心身の變化發達、女をめぐる哲學者、彫刻家等の思想感情、女が最後に得た

ブルガリヤの勇士、勇士の死後、その國の反亂軍に女が健氣にも投じ行く所まで書いてある。題の『その前夜』は反亂の前夜の意味になつて居る。譯筆は暢達で細かに行き届いて此種のものに最も適して居る。

### 『東京毎日新聞』批評

▲相馬御風君の近著『その前夜』はツルゲネフが傑作『オン、ゼ、イーヴ』の翻譯にして、近時の一好著として推奨すべし。ツルゲネフは云ふ迄もなく露國近代小説の巨擘、吾人を見る所を以てすれば既に古今を通じて世界有数の文學者なり。之を丸善の店頭について聞くに、近代小説家の作中ツルゲネフの小説は、其の最も賣高多きもの、一なりと。相馬君が其の佳什の一たる『オン、ゼ、イーヴ』をとりて忠實に之を重譯し公刊したるは其勞を深謝すべし。

▲尤もツルゲネフの作は或點より見れば世道人心に害ありと云はゞ云ふべし、其中心思想は極端なる厭世的觀念なり、而して之を讀む者は常に人生の空虚と寂寞とに其心臓を射抜かれずんば已まざるなり。彼の生れたる時代は露國思想界の一大クライシス、露國の人心は此時に於て解放の機運に際しぬ、所謂教養ある當代の上流人士は新に入り來りたる西歐の文明と科學との大波を蒙りて、其の特有なる國民思想は根幹より震盪せられたり、彼の燃犀の眼光を以て此の如き精神上の無政府とも云ふべき當代の新教育を受けたる青年男女を寫す、吾人を以て之を見ればツルゲネフが描寫したる當代の露西亞は、これ即ち我國現時の状態なり、之を不健全と云はゞ云ふべきも我國一部青年の頭腦を支配するものは確かに此潮流なり、識者の注意を怠るべからず。

▲教育に害ありとて此の如き小説は讀み嫌ひに依りては無上の教訓なり。危険なる思潮の流行は之を禁じたりとて已む可からず、現今の道徳教育家乃至宗教家にしてツルゲネフの小説を讀んで眞に之を理解し、體諒し、此精神上の支配者を失ひたる現代青年の状態に對して眞に同情の熱涙を澆ぐ者あらば救済の道は夫等の人々に依りて開かれん。吾人は現今我國思想界の先達と稱せらるゝ人々の、此點に關して極めて冷淡不親切なるを憤らずんば非ざるなり。

『讀賣新聞』批評

◎ツルゲーネフの『その前夜』は相馬御風氏によつて翻譯された。譯文も可成巧みて、直譯臭味もなく、手に執るとすらくと結末まで讀み終らざるを得ない。女主人公のエレナは云ふまでもなく、インサロフ、シユービ  
ン、ペレセネフの性格がそれと明瞭に描き出され、誇張せず奇を弄せず、平坦なる叙述の底に、思想上の波瀾  
入生の惨事の讀者の胸に迫るものがある。父と子との考の相違して互ひに調和しがたきはツルゲーネフの作中  
に屢々現はれぬるが、日本の現状も稍々これに類し、又次第に爾かあらんとしてゐる。新舊の思想感情の衝突、  
家庭問題、父子夫妻の關係は、日本に於ても、やがて重大な波瀾の元となるであらう。現に『その前夜』を讀ん  
で感に打たれる女子もあらう。吾人はかゝる女子の多からんことを望む。少くも『不如歸』を讀んで泣く女より  
も、『その前夜』に泣く女の方が好きだ。

◎ツルゲーネフ作中の女は智慧があつて勇氣があり、男は却て意氣地がなく、因循姑息のために戀を失つては、  
最後に「あゝ人生は」と歎じたり、薄志弱行のため下らぬ女に愚弄されて終に溜息つくことが多い。日本でも次  
第にこんな青年が多くなりさうだ。警戒せざるべけんや。ツルゲーネフ作中の人物ではバザロフが多小毛色が  
違つてゐてメツメツと驚てはない。一人の女に嫌はれれば又他の女を捜す、「世界は廣い」と言つてゐる。愛した  
女のお情け的の握手を斥けた男である。

◎『その前夜』にも結末にツルゲーネフにお定まりの人生觀を述べ、「どうしてかう早く人生は過ぎ去るであら  
う」云々と死を漁夫に譬へ人を網中の魚に比して歎じてゐる。予は數年前この書を讀んで、この結末に至つて、  
著者と共に歎息した。ツルゲーネフの好きなもの、この優しい憐れな情緒に動かされたからであつた。しかし  
今はこんな感じに倦んだ。

◎この作では辻堂の場と觀劇の場が圖抜けてよい。この邊は二葉亭氏の筆を煩はしたい。エレナがインサロフ  
を戀する動機として、インサロフの悪漢退治を用ひたのは、武勇傳以來で、女が男に惚れるのは古今東西撰を一  
にすと思はる。矢張り男らしくて、親切で、手頼り甲斐ありと思はれるのが愛を得る所以であらう。

百島冷泉譯述

トルストイ短篇集

再版 \* 定價金參拾錢 \* 郵稅四錢

『神の審判』『高加索の囚人』を始め、悲惨なるもの無邪氣なるもの壯嚴なるもの、凡  
てトルストイ翁の短篇小説十一篇を收めたり。譯振り又忠實なる逐字譯にして些  
も晦澁なる點なく、詞句穩健にして修飾の厭味なき所頗る原文の率直にしてナレーチ  
ーブなる體に適へり。トルストイ翁を渴仰する者は更にも云はず、世の力ある温  
神父の樂しき訓話に渴する者は、必ずや一本を携へて此十一篇に何等かの偉大なる  
天啓を聞く所なかるべからず。 (萬朝報)

トルストイ翁の短篇十一種を譯して一纏めにしたるもの、何れも皆深き道德的教訓  
を含み、無邪氣にして且つ高さ趣味あり。譯文亦流暢些の澁滞なく、能く原著の面  
影を傳へたり。健全なる家庭の讀物少なき今日斯くの如き書籍を出版せられたるを  
祝せざるべからず。 (福音新報)

トルストイ翁は思想界の光明なり、文壇の巨手なり。世界が翁の偉大を稱揚する所  
以も亦翁がよく趣味と教訓とを合一するところにあり。此書は表題の如くトルスト  
イ翁の短篇物語十一篇を收めたり、偉人の面目は全然之を以て推すべからずと雖も、  
また以て此偉人が如何に世道人心の歸趣を教ゆるに盡瘁しつゝあるかの一般を察す



べき也。加ふるに譯文極めて平明暢達、よく内容と相調和し、何人も解すべく、何人も興味を感ずべく、而して何人も面白く讀過の際無限の光明と教訓とを感受し得べきなり。

（ハガキ文學）

文豪トルストイ伯の作品が、一時絶大の勢力を以て日本文壇に歡迎されたる事は、今更いふも愚であるが、従つて又其の誤を傳へられた事も尠少ではない。歡迎は或る意味に於て盲讀であつた。今這の盲讀の境涯から稍々一步を向上して本巻は、實に『神の審判』『高加索の囚人』『悔改めたる囚人』『愛の反響』外七篇を收めて居るが、如何してもトルストイを讀んで居る様な氣がしないのだ。總じてトルストイの作品は深刻である、壯麗である、若しくは難澁である、是れを字句の儘譯しても仲々面白味はない程であるのに、能く愴く迄に平易輕妙に意譯した一事に至つては、吾人は慥かに冷泉氏の手腕に感ぜざるを得ないのである。

（新公論）

杜翁の短篇十一を蒐む、翁の作世既に定評あり、短篇また蛟龍の鱗片を見る心地す。

（文學俱樂部）

早稻田出身の百島操氏がトルストイ伯の短篇『神の審判』以上十一種を翻譯したものの、文字平易流暢に能く原意を傳へたるは譯書として相當にその効果を收めしものと言ふべく、トルストイの教訓に耳を傾けんとする人々にはよき讀物ならん。

（世界的青年）

『神の審判』他十篇、言文一致の温雅な筆つきて平明に譯したもの、『高加索の囚人』のやうな極めて自然な物語もあるが、多くはトルストイ一流の教訓の意を籠めたお伽噺めいたもので、少年の讀物として好恰なもの、一つであらう、（早稻田文學）

## 内外出版協會（東京巢鴨上駒込山縣邸内）發兌書目

（明治四十一年十一月改正）

博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
職分	品性	勤儉	自助	勞働	克己	青年	人生	處世	社會
論	論	論	論	論	論	訓	訓	訓	訓
定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金五拾錢 郵稅六錢	定價金六拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢	定價金二圓拾錢 郵稅(小包)八錢
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述
博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述	博士スマイルス原著 文藝士 若月保裕譯述	博士スマイルス原著 文藝士 竹村修譯述

吉川潤二 原著 ハルニテ 譯述 人生の行路 定價金二圓三拾錢 郵税(小)八錢	吉川潤二 原著 ハルニテ 譯述 人生の實務 定價金五拾錢 郵税 六錢	大原英次 原著 ワカネ 譯述 人生の福音 定價金五拾錢 郵税 四錢	文學士竹村 修譯述 トウニシテ 譯述 人格の養成 定價金參拾五錢 郵税 四錢	山縣佛三 原著 トウニシテ 譯述 天眞の生涯 定價金參拾錢 郵税 四錢	河面仙四 原著 コニシテ 譯述 有用の生涯 定價金四拾錢 郵税 四錢	吉川潤二 原著 ハルニテ 譯述 向上的生涯 定價金六拾錢 郵税 六錢	文學士竹村 修譯述 ハルニテ 譯述 青春の佳期 定價金八拾錢 郵税(小)八錢
--	--	---	--	---	--	--	--

前田定之介 原著 ワカネ 譯述 如何して慰安を求む 定價金參拾錢 郵税 四錢	内外出版協會 譯纂 博士バンクス 原著 修養の全書 定價金二圓三拾錢 郵税(小)八錢	水島靜處 譯述 フアラニシテ 譯述 理想の紳士 定價金貳拾五錢 郵税 二錢	文學士藤原秀峰 譯述 ヘレン・ケラー 原著 人道と天道 定價金參拾錢 郵税 四錢	内外出版協會 譯纂 博士バンクス 原著 樂天主義 定價金貳拾五錢 郵税 四錢	内外出版協會 譯纂 博士バンクス 原著 廿世紀の武士道 定價金參拾錢 郵税 四錢	内外出版協會 譯纂 博士バンクス 原著 わが青年 定價金參拾錢 郵税 四錢	文學士村上池洲 譯述 ウオスターマン 原著 社會の要する少年 定價金參拾五錢 郵税 四錢
--	--	---	--	--	--	---	--

ロースヴェルト 原著 文學士鎌田繁吉 譯述 ロースヴェルト集 定價金四拾錢 郵税 四錢	若宮卯之助 譯述 英和 譯述 座右銘 定價金四拾錢 郵税 四錢	内村鑑三 編 英和 譯述 偉人と讀書 定價金拾五錢 郵税 二錢	文學士 中村瞻山 譯述 日常生活 行為の標準 定價金貳拾錢 郵税 二錢	中里介山 編著 克己制慾の實例 定價金貳拾五錢 郵税 四錢	水島靜處 譯述 日常生活 日常生活的勇士 定價金參拾五錢 郵税 四錢	オランダ 大學總長 原著 若宮卯之助 譯述 廿世紀の青年告 定價金參拾錢 郵税 四錢	内外出版協會 譯纂 歐米の新思潮 定價金四拾錢 郵税 六錢
---	---	---	---	--	--	--	--

ストロンク 原著 文學士皆川正徳 譯述 時勢と青年 定價金四拾錢 郵税 四錢	占部百太郎 著 青年の修養 定價金貳拾五錢 郵税 四錢	宮崎右夫 著 貧乏の朋友 定價金拾五錢 郵税 二錢	七ツヤ 原著 文學士若月保治 譯述 立志の動機 定價金五拾錢 郵税 六錢	好本 譯述 好本 譯述 教育上の常識 定價金貳拾五錢 郵税 四錢	本田増次 譯述 婦人の修養 定價金五拾錢 郵税 六錢	落合 雄 譯述 婦女小訓 定價金貳拾錢 郵税 不 要	加藤 眠柳 編著 女子立志編 定價金五拾錢 郵税 六錢
--	--------------------------------------	------------------------------------	--	--	-------------------------------------	-------------------------------------	--------------------------------------

内外出版協會譯纂  
人生問題叢書 定價金九拾錢  
郵稅(小)八錢

二。成功書類

博士マーデン原著  
實業に就かん青年 定價金壹圓  
郵稅(小)八錢

文藝士 竹村修譯述  
商業の模範的經營 定價金六拾錢  
郵稅 六錢

博士マーデン原著  
成功の基礎 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

内外出版協會譯述  
眞正の成功者 定價金五拾錢  
郵稅 六錢

博士マーデン原著  
成功 定價金壹圓  
郵稅(小)八錢

内外出版協會譯述  
成功論 定價金貳拾五錢  
郵稅 四錢

アルダーソン原著  
成功の福音 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

松岡正男譯述  
失敗の成功 定價金貳拾錢  
郵稅 二錢

三。傳記書類

博士ヘール原著  
波多野烏峰譯述  
自傳 定價金四拾錢  
郵稅 四錢

文藝士 竹村修譯述  
わが生涯 定價金五拾錢  
郵稅 六錢

山縣三郎原著  
及び其の事業 定價金貳拾五錢  
郵稅 四錢

松村 巖崎彌太郎 定價金參拾五錢  
郵稅 不 要

新公論社編纂  
現代名流自傳 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

波邊修二郎編著  
佐倉木内惣五郎實錄 定價金貳拾五錢  
郵稅 四錢

山田美妙著  
アギナルド 定價金五拾錢  
郵稅 六錢

吉川會水著  
チエンバーレン 定價金貳拾錢  
郵稅 不 要

阪井久良岐著  
明治崎人傳 定價金貳拾五錢  
郵稅 不 要

松村 藤 勇 定價金貳拾五錢  
郵稅 不 要

四。偉人言行錄

村上賢造編著  
第一リンコン言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

中里介山編著  
第二トルストイ言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

中里介山編著  
第三カーフキールド言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

中里介山編著  
第四フランクリン言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

村上賢造編著  
第五グッドストーン言行錄 定價金貳拾五錢  
郵稅 四錢

中里介山編著  
第六二宮尊徳言行錄 定價金貳拾五錢  
郵稅 四錢

加藤信正編著  
第七ローズヴェルト言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

百島操編著  
第八ワシントン言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

波邊修二郎編著  
第九山鹿素行言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

中里介山編著  
第十中江藤樹言行錄 定價金參拾錢  
郵稅 四錢

秋山悟庵編著 第十編 貝原益軒言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
松本越編著 第二編 ルーラル言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著 第三編 大石良雄言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
秋山悟庵編著 第四編 聖德太子言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
五十嵐越郎編著 第五編 吉田松陰言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著 第六編 渡邊崋山言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
本田無外編著 第七編 熊澤蕃山言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著 第八編 新井白石言行錄	定價金四拾錢 郵稅四錢

文學士藤吉喜二編著 第九編 ナポレオン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
松本越編著 第十編 ネルソン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
室田有編著 第十一編 ウェリントン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
大屋徳城編著 第十二編 日蓮上人言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
田中豊松編著 第十三編 中興松言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
百島操編著 第十四編 ゴッルドン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
姉崎準平編著 第十五編 ヴィンクストン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
横不二夫編著 第十六編 伊藤仁齋言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢

本田無外編著 第七編 道元禪師言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
河面仙四郎編著 第八編 クロムウエル言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
四島玉峯編著 第九編 諸葛孔明言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
松原至文編著 第十編 親鸞聖人言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
大屋徳城編著 第十一編 弘法大師言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著 第十二編 徳川光圀言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
廣瀬勸次郎編著 第十三編 フレーベル言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
秋山悟庵編著 第十四編 林子平言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢

村田厚川編著 第五編 佐久間象山言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
北島竹之助編著 第六編 司馬溫公言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
本田無外編著 第七編 法然上人言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
松原至文編著 第八編 西郷隆盛言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
廣瀬勸次郎編著 第九編 ガリバルヂ言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
松本越編著 第十編 マホメット言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
丸島敬編著 第十一編 本居宣長言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
秋山悟庵編著 第十二編 上杉鷹山言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢

### 五. 家庭書類

附婦女及少女書類

杉原三省編著 第三編 高野長英言行錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
勝水瓊泉編著 第四編 大鹽平八郎言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
大屋徳城編著 第五編 傳教大師言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
田中豐松編著 第六編 シーザー言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
佐久間原編著 第七編 シニクスヒーア言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊芳雄編著 第八編 ラスキン言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
武安衛編著 第九編 孟子言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢
吉川潤二郎編著 第十編 ビスマルク言行錄	定價金參拾錢 郵稅四錢

シニクスヒーア原著 文士吉川秀雄譯述 家庭に於ける職分	定價金五拾錢 郵稅六錢
堺 枯川著 家庭の新風味	定價金壹圓 郵稅小壹圓八錢
堺 枯川著 家庭の夜話	定價金壹圓 郵稅小壹圓八錢
文士 竹村修譯述 家庭講話	定價金五拾錢 郵稅四錢
内外出版協會譯述 理想の母	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
文士 菅川正祐譯述 良人の選定	定價金參拾五錢 郵稅四錢

スウェル女史原著  
本田増次郎譯述  
**黒馬物語**  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

羽仁もと子著  
家庭之友  
**家計簿**  
定價金四拾錢  
郵稅六錢

羽仁もと子著  
家庭之友  
**主婦日記**  
定價金參拾五錢  
郵稅六錢

文學士菅川正祐譯述  
**母の道**  
定價金貳拾錢  
郵稅二錢

加藤眠柳譯述  
**英國士道物語**  
定價金參拾五錢  
郵稅不

堺 枯川著  
家庭文學  
**枯川隨筆**  
定價金貳拾錢  
郵稅不

四洞たみの譯編  
偉人に及ぶ婦人の感化  
ほせる

和田源元編  
**日本女鑑**  
定價金四拾錢  
郵稅四錢

千河岸櫻所著  
**日本武士氣質**  
定價金四拾五錢  
郵稅六錢

羽仁もと子著  
家庭小話  
定價金貳拾五錢  
郵稅四錢

文學士菅川正祐譯述  
如何にして生活すべき乎  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

羽仁もと子著  
如何に家計を整理すべき乎  
定價金參拾五錢  
郵稅四錢

羽仁もと子著  
家庭問題  
定價金參拾五錢  
郵稅四錢

羽仁もと子著  
家庭教育の實驗  
定價金參拾五錢  
郵稅四錢

醫學博士加藤照磨譯述  
育兒法  
定價金六拾錢  
郵稅八錢

羽仁もと子著  
育兒の樂  
定價金拾五錢  
郵稅二錢

博士ウオカ原  
醫學士田村真鏡  
衛生美容術

定價金五拾  
郵稅四錢

伊國カクリオ  
西洋獨占

定價金貳拾五  
郵稅四錢

篠田鎮造著  
幕末百話

定價金四拾  
郵稅四錢

宮崎三味編  
はなしの仙郷

定價金貳拾  
郵稅二錢

波多野烏峰  
家庭小説  
愛の力

定價金貳拾  
郵稅二錢

少年團編  
このども

定價金貳拾  
郵稅四錢

朝夷孤舟編  
ちよのくら

定價金貳拾五  
郵稅四錢

桑田常蔵著  
馬場原著  
儉約のすゝめ

定價金貳拾  
郵稅二錢

成澤金兵衛編  
家庭遊戲全書

定價金參拾  
郵稅四錢

大藏大臣認許  
内外出版協會  
新案  
國旗合せ

定價金貳拾  
郵稅二錢

内外出版協會  
新案  
家族合せ

定價金拾貳  
郵稅二錢

内外出版協會  
新案  
室内ベースポール

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第一編  
天路歷程

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第二編  
奴隸トム

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第三編  
聖書物語

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第四編  
赤靴物語

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第五編  
二人巡禮

定價金貳拾  
郵稅二錢

百島冷泉編  
第六編  
漂流記

定價金貳拾  
郵稅二錢

六。俳諧書類

附川柳狂歌書類

高濱盧子著  
俳句入門

定價金貳拾五  
郵稅四錢

寒川鼠骨著  
歲事記例句選

定價金五拾  
郵稅四錢

佐藤紅綠著  
俳句小史

定價金四拾  
郵稅四錢

山田三子編  
蕪村俳句全集

定價金貳拾五  
郵稅四錢

大塚甲山編  
一茶俳句全集

定價金貳拾五  
郵稅四錢

熊谷無瀧編  
天明俳句集

定價金貳拾五  
郵稅四錢

大塚甲山編  
明治新俳句集

定價金貳拾五  
郵稅四錢

渡邊水巴編  
新俳句選

定價金貳拾  
郵稅二錢

高柴象外編  
俳句語彙

定價金貳拾  
郵稅二錢

大塚甲山編  
芭蕉俳句全集

定價金貳拾五  
郵稅四錢

熊谷無瀧編  
許六俳句集

定價金拾貳  
郵稅二錢

大塚甲山編  
元祿十家俳句集

定價金貳拾五  
郵稅二錢

永井孤秋編  
女流俳家句集

定價金貳拾五  
郵稅二錢

佐藤紅綠編  
滑稽俳句集

定價金貳拾五錢  
郵稅四錢

文學士 沼波瑠音編  
俳諧奇調集

定價金貳拾五錢  
郵稅二錢

古 沼波瑠音 共編  
名流俳句談

定價金參拾錢  
郵稅四錢

今 藤鳴雪選評  
俳句選

定價金參拾錢  
郵稅四錢

花岡百樹編  
川柳類纂

定價金貳拾五錢  
郵稅四錢

藤波樂齋編  
川柳名句選

定價金貳拾錢  
郵稅二錢

新柳樽

定價金貳拾錢  
郵稅二錢

高橋太華編  
類題狂歌大全

定價金參拾五錢  
郵稅四錢

七。語學書類

東京外國語學校教授  
片山寬著  
英語の手紙

定價金貳拾五錢  
郵稅四錢

波邊修二郎著  
英語獨案内

定價金四拾錢  
郵稅四錢

波邊修二郎著  
英和日用會話

定價金四拾錢  
郵稅四錢

波邊修二郎著  
英和書翰文例

定價金參拾五錢  
郵稅四錢

波邊修二郎著  
英語作文便覽

定價金五拾錢  
郵稅四錢

新澤岩太合著  
實用英語會話

定價金參拾錢  
郵稅二錢

英語自修論

定價金貳拾五錢  
郵稅四錢

山縣五十雄譯註  
英文學研究

定價金壹圓  
郵稅小冊八錢

高等師範學校教授  
本田増次郎註解  
英文詳解

定價金參拾錢  
郵稅二錢

波邊修二郎著  
獨逸語獨案内

定價金五拾錢  
郵稅四錢

トサトウ英譯  
JAPAN 1853-1854  
(英文開國史談)

定價金五拾錢  
郵稅六錢

波邊修二郎校補  
邦國史談(別冊英)

定價金參拾錢  
郵稅四錢

トサトウ英譯  
HISTORY OF JAPAN  
(英文日本近世史略)

定價金五拾錢  
郵稅四錢

高等師範學校教授  
本田増次郎註解  
英雄論詳解

定價金貳拾五錢  
郵稅二錢

若松暖子譯  
セーラクル物語

定價金參拾錢  
郵稅四錢

文學士皆川正壽譯註  
英和對照  
小野竹三註  
英米名家詩抄

定價金參拾錢  
郵稅四錢

波邊修二郎著  
初學英語速成

定價金四拾錢  
郵稅四錢

ワグネル原著  
文學士皆川正壽譯述  
ワグネル物語

定價金六拾錢  
郵稅六錢

相馬御風譯述  
その前夜

定價金七拾錢  
郵稅六錢

山田美妙譯  
血の涙

定價金參拾錢  
郵稅四錢

伊藤銀月著  
最新東京繁昌記

定價金五拾錢  
郵稅不取

平木白星著  
日本國歌  
定價金參拾錢  
郵稅四錢

山田美妙譯  
御婦人殿下  
定價金貳拾錢  
郵稅不取

百島冷泉譯  
下ルス短篇集  
定價金參拾錢  
郵稅四錢

河井醉茗編  
新體青海波  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

原抱一庵譯  
ABC組合  
定價金拾五錢  
郵稅不取

原抱一庵譯  
十二健兒  
定價金貳拾錢  
郵稅不取

宮崎三味編著  
中學文範  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

寒川風骨編著  
寫生文  
定價金四拾錢  
郵稅六錢

寒川風骨編著  
日記文  
定價金四拾錢  
郵稅六錢

界文 枯川著  
普文  
定價金貳拾五錢  
郵稅二錢

山田美妙著  
一致文  
定價金五拾錢  
郵稅四錢

五十嵐越那編  
新編女子文範  
定價金參拾五錢  
郵稅四錢

少年團編著  
詩學捷徑  
定價金貳拾錢  
郵稅不取

文學士 佐々政一編  
中等教科書類  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

文學士 林森太郎編  
日本文學史要  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

文學士 林森太郎編  
國語讀本  
定價金五拾錢  
郵稅八錢

簡野道明編  
初等漢文讀本  
定價金八拾錢  
郵稅八錢

文學士 原男六著  
簡易西洋史  
定價金七拾錢  
郵稅八錢

第一高等學校教授  
文學士 杉敏介著  
日本小語典  
定價金參拾錢  
郵稅四錢

ホルドキン原著  
文學士 生田弘治譯  
讀書の趣味  
定價金八拾錢  
郵稅八錢

若宮卯之助譯  
東洋文明論  
定價金四拾錢  
郵稅四錢

一〇 雜書

內外出版協會編纂  
袖珍百科全書  
定價金壹圓廿錢  
郵稅八錢

工學士 後藤一郎著  
寫真術全書  
定價金五拾錢  
郵稅六錢

松居松葉著  
自轉車全書  
定價金參拾錢  
郵稅四錢

關根默庵著  
演劇大全  
定價金六拾錢  
郵稅六錢

渡邊修二郎著  
各國分類年表  
定價金八拾錢  
郵稅六錢

大下藤次郎著  
水彩畫階梯  
定價金參拾錢  
郵稅四錢

渡邊修二郎著  
各人必携 百科節用  
定價金貳拾錢  
郵稅二錢

工學士 市川紀元二著  
應用骨相學  
定價金參拾錢  
郵稅四錢



北澤寅之助合著  
成澤金兵衛合著

渡米案内

定税金拾四銭  
郵税四銭

瀧澤彦太郎著

養蠶新書

定税金拾四銭  
郵税四銭

全國學校案内

定税金五拾銭  
郵税六銭

旅行談

定税金貳拾銭  
郵税不要

就業自活案内

定税金拾四銭  
郵税四銭

女子の新職業

定税金拾四銭  
郵税四銭

女子の新職業

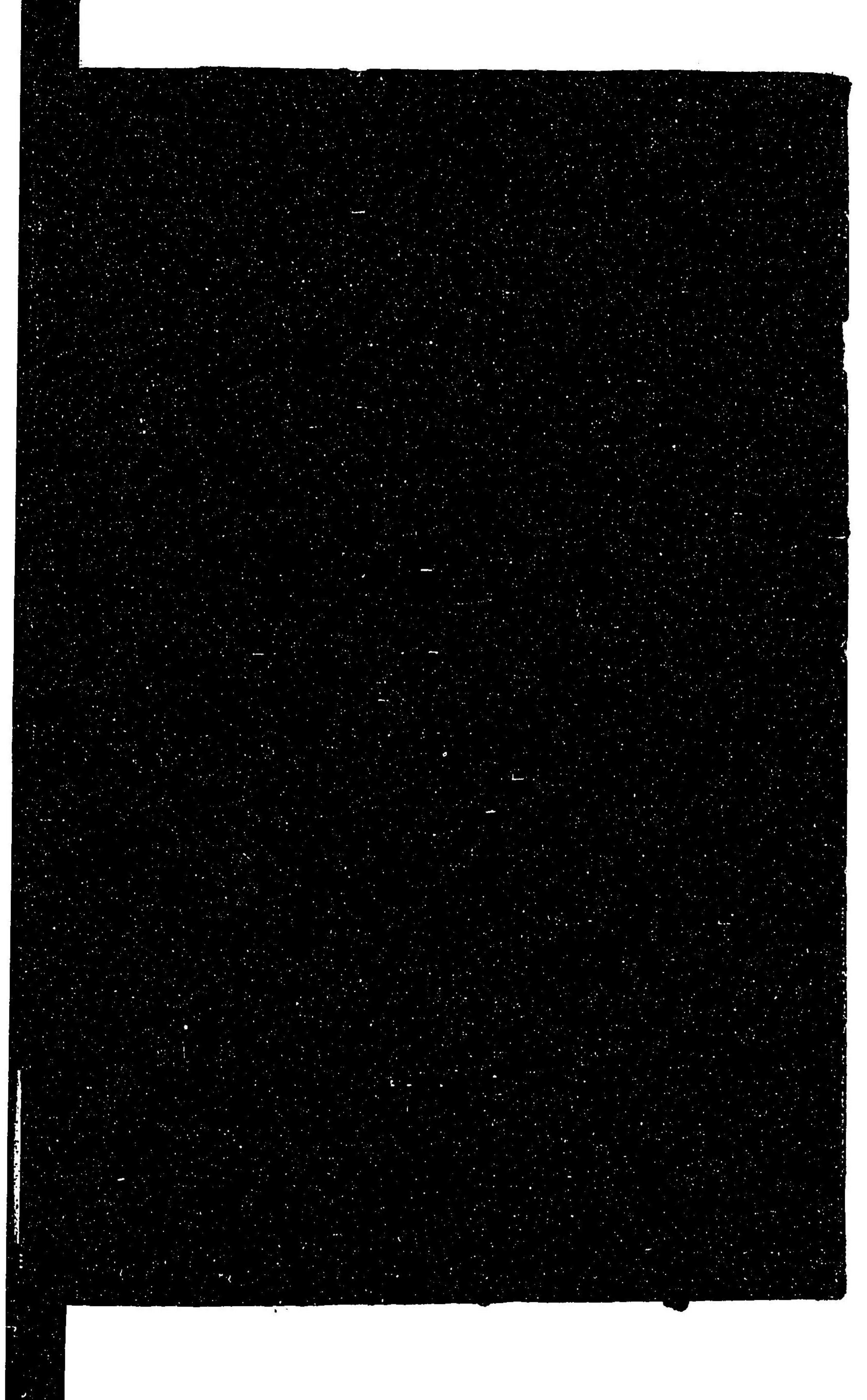
註文并に送金について

- 一、御注文は圖書雜誌代價及び郵税共一切前金の事。御送金は振替貯金、郵便爲替何れにてもよろしく候。代金引換小包郵便は、特別の場合の外、冗費多く候に付御断り申上候。
- 一、振替貯金は最も便利なる送金法に候。此送金法に依るときは爲替料、郵税、書留料等も拂ふの必要なく、而かも不着の恐れ毫も無之候。委細は最寄郵便局にて御尋ね可被成候。
- 一、本會の振替貯金口座番號は「第三百五十五番」に候。加入者住所氏名は「東京某町上陶込十九番地」内外出版協會に候。
- 一、郵便爲替にて御送金の際にも、爲替の受取局名を「東京本郷上宮土前」受取人を「内外出版協會」とし、御指定に相成らば、別に爲替になさらずとも爲替金を盗み取り、又は受取人に無之候。
- 一、郵券代用は紛失の場合に取調への道無之候故成る可く御断り申上候。然かも已むを得ず郵券にて御送附の節は必ず一割増にて御送り被下度候。一割増ならざるものは總て一割増の申受に換算可被候。
- 一、御注文の節は住所氏名等詳細に楷書にて御認め被下度候。御居の御通知には必ず新舊の住所共御明記被下度候。御照會には葉書又は郵券拾銭御封入返信を要する。御照會には葉書又は郵券拾銭御封入被下度候。

517

32

373





101220-000-0

32-373

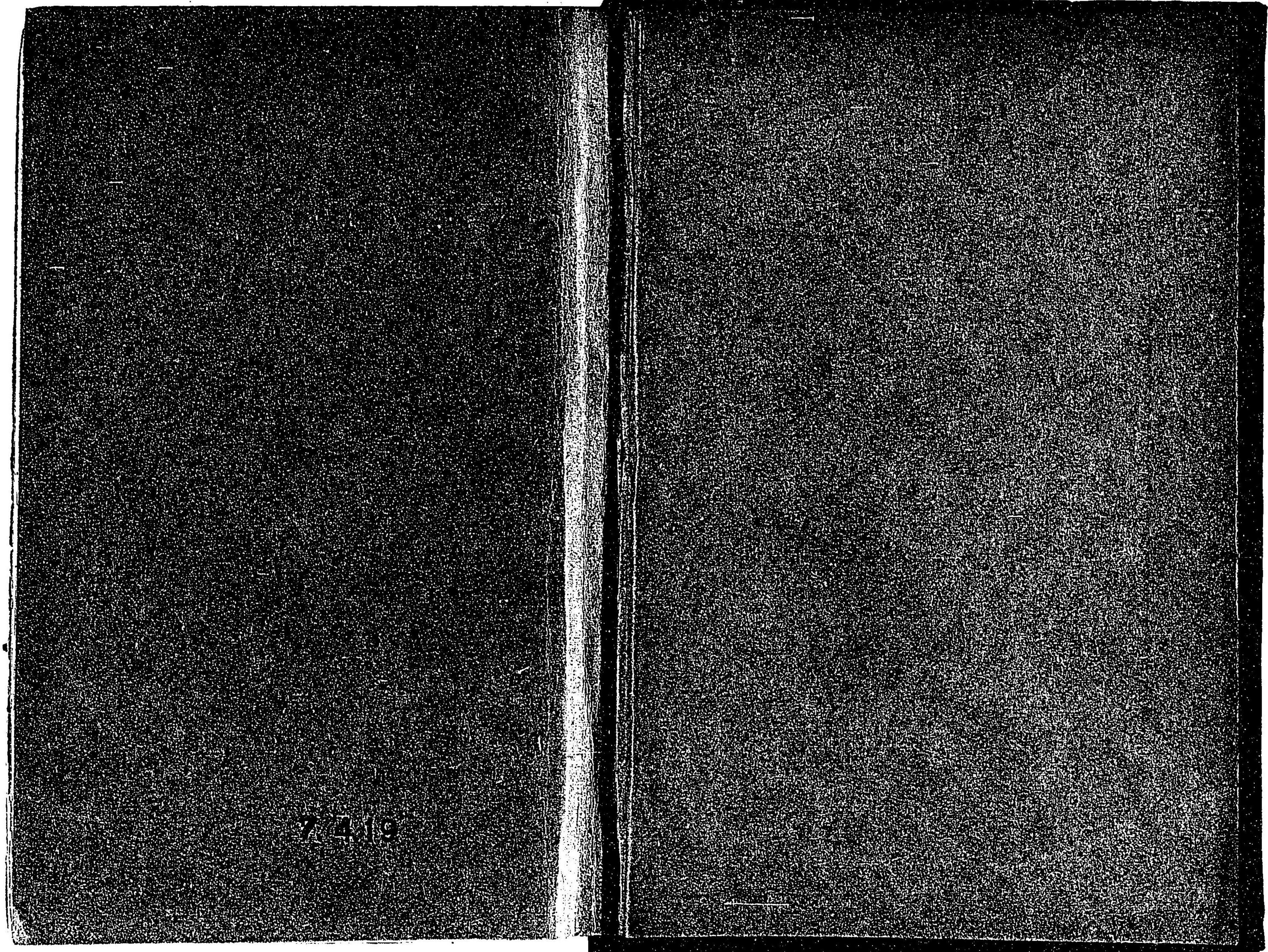
ツルゲーネフ短篇集

吉江 孤雁ノ訳

M41

DBY-0536





7419